
阪本君と田中君

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

阪本君と田中君

【Nコード】

N8157H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

人間だれしも、見栄が張りたい。そういう年ごろがある。知らないことも知っている風に見せたいじゃないか。そういう二人が繰り出す、ほのぼののコメディが今ここに誕生した。さあ。READING
MAGIC

第一話

第1話 阪本君と田中君

「切符を下さい。」

駅員の窓口で切符を買う男がいた。

「どこまでですか？」

駅員は問した。

「それは言えないな。国家機密だ。」

男は駅員にいった。

「言えないなら、その切符の自動販売機で買ってください。」

そついうと駅員は自動販売機にむかつて指を指した。

僕は思った。やるな駅員。

「それは困る。」

「なぜですか？」

駅員は疑問に思った。

「なぜなら、僕は自動販売機を使った事がない。」

僕は自慢げに言った。

「ジューズの自販機と一緒にですよ。お金を入れて、切符を買ったらいいですよ。」

「仕方ない、では買ってきてくれないか。」

僕はお金を出した。万札を。

「だから、どこまでですか。」

「だから言えないと言っているだろう。国家機密だ。」

「そうですか。では、一万円分のチケットを発行しますので、これで好きな場所に行ってください。」

そついうと駅員はチケットを渡した。

「初めから、そうすればいいんだよ。君。」

僕はそついうとチケットを受け取り改札を通った。

僕はだれっだて、ふつ、それは国家機密さ。

「おい、阪本君。」

手を振りながらこちらにむかってくる男がいた。

「こら、田中、国家機密を軽々しく言うな。」

「ごめらんす、阪本君。」

「田中————。」

田中の顔をビンタした。

「いたらんす。」

田中はぶっ飛んだ。

「ごめんよ。阪本君。」

「まだ言うか。田中——。」

もう一度、田中の顔をビンタした。

「OKらんす。もう言わないよ。阪本君。」

「.....」

僕は無言で往復ビンタした。

「もうしゃべるな。」

「分かったよ。阪本君。」

僕は思った。こいつは天然だ。

とりあえず、僕は電車乗り場に向かった。

「ま、まってよ。阪本く——ん。」

僕はもう諦めた。

まずは時刻表を見た。

「阪本君、普通と急行と特急があるよ。どついう意味なんだろう。」

田中は聞いてきた。僕は、そんなことも知らないのかと呆れたが質問に答えた。

「まず、普通と言うのはな、時刻通りに出発する電車という意味だ。」

「

なるほど」

田中は聞いていた。

「で次に急行というのは、急に出発するという意味だ。例えば、電

車に乗るだろ。」

「うんうん」

「電車に乗ったら、いつ出発するかが分からない。急に出発するかから急行と言った。わかったか。」

「すごいや、阪本君は知識豊富だね。」

「まあな。で最後に特急と言っのはな。」

「うん。」

「特急はな。特別に急いでいる人しか乗れないんだ。もし急いでいない人が乗ると死んでしまうんだ。」

「まじで、知らなかったよ。阪本君。だから、電車の事故で死亡しましたってあるんだね。」

「そのとおりだ。田中。電車は知識がなくては乗れない危ない乗り物なんだ。」

阪本は自慢げに言った。

田中は阪本を尊敬のまなざしで見ていた。

「あのうー。」

駅員が声を掛けてきた。

「なにかね。」

「あつ、電車のことなら知っていますよ。阪本君に教えてもらったので。」

田中は駅員に自慢げに言った。

「あのそのことなんですけど、ちょっと先ほどの話を聞くきはなかったんですけど、耳に入ったもので。その、普通と急行と特急の意味と言いますのは、駅の止まる数が違うんですよ。普通がすべての駅にとまり、急行がおおまかな駅にとまり、特急は限られた駅にか止まらないんですよ。それでは。」

そついうと駅員は去っていった。

「阪本君……実は知らなかったの。」

「……ごめん。見栄張っていただけです。」

「そうならそうと言ってくれれば良かったのに。」

「た、田中。」

田中は笑顔で阪本の腹にパンチをたたきこんだ。

「ぐはぁ・・・」

阪本はその場にひざまずいた。そのとき電車が到着した。

「乗るぞ。阪本。」

「はい、田中君。」

こうして二人は電車に乗った。

続く

第二話（前書き）

やつらは今日も突っ走る。さあ
読むんだ。そして全作品に感想をのべよう。さあREADING

第二話

「阪本君」

田中の声が今日も冴えわたる今日この頃である。

「そうでーす、僕は阪本だよって何、田中」

やさしい感じから一変し急に切れたした。現代っ子みたく。

「な、何って阪本君が今日パ・チ・ン・コにつれてってくれるんだろ。今日俺のパチンコデビューさ。勝ちまくるぞうさん。パチンコだけに」

あたり一面寒くなった。

「あれ、阪本君突っ込まないの、ぞうさんだよ、ぱちんこだけに。おもしろいぞうーさん。はい、はい、はいはいぞうーさん、ぞうーさん、ぱーちんこ似てるのよ。そうーね母ちゃんもすーきなのよんよん」

あたりがさらに冷たくなった。

「おまえ、黙れや、連れて行かんぞ。パチンコに」

阪本の顔が急に豹変した。

「ご、ごめん」

田中はすぐに謝った。

阪本は考えていた。やべーよ。俺パチンコなんか行ったことねーよ。パチンコってなんだ。なぜ、卑猥な文字が入っているんだよ。どういう遊びなんだ。パチンコということはセチンコっていうものもあるんじゃないかな。パリーグ、セリーグ見たいに。うんそうだ、そうに違いない。今日は阪本さえてる。

「知ってるかい、田中君、パチンコはね、二種類あるんだ」

「知ってるよそれぐらい、パチンコとスロットだろ」

田中が答えた瞬間阪本が田中のけつをけり上げた。

「ばっきややろう、違っわ、パチンコにはな、セチンコがあるんだ

よ。まあ野球でいう、パリーグやセリーグ見たく。おまえ恥ずかしいわ。パチンコとパチスロ。笑われるぞ。あほか」

「ごめんよ、さすが阪本君物知りだね」

「ふん、まあな、よかったな。知らずは一生の恥、聞くのは一時の恥つてか。今日は勉強しつかりしろよ。パチンコ博士にしてやるよ」
阪本はいつもの知ったかぶりを出し始めた。

「それから、まずパチンコ屋に入ったらしくてはいけないことがある。分かるか」

阪本は田中に質問した。

「うん、台選びだね」

またもや阪本のけりが田中のけつをけり上げた。

「ちやうわぼけが、パチンコ屋にいったらな、まずはあそこを洗うんじゃ。それが礼儀つてもんなんだ。パチンコつて名前あるからわかるやろ、あそこやあそこ。これ以上は言わんでもわかるやろ。おまえ立ち入り禁止なで、出禁になるところやで、勘弁してや。全く。店員聞きにくるぜ、その時答えられんかったら、終わりやで、周りにあいつくさ、くっさと思われるはずいなあ、はずいわあ」

「そ、そうなんだ。助かったよ。阪本君、あやゆく出禁とくっさと思われるところだったよ」

田中は感心していた。

「よし、それでは出発するか」

「うん」

二人はパチンコ屋に向かった。

第三話（前書き）

さて、これぞ爆笑コメディナンバーワンの作品、阪本君田中君の第三だん、おなががよじれてもいいという方は読むべし、さあREADING

第三話

「さあて、ついたで、さっそくトイレや」

「わかったよ、阪本君」

それから、数分後

「これで、OK。準備もOK、田中は」

阪本は田中のほうを見た。

「くっさくないよ、俺はくっさくない、くさくないんだよ」

「そうか、では、戦場に行こうか」

二人はトイレに出た。

「すごい音だよ、阪本君」

「まあな、これは俺を歓迎している曲さ」

「そうなの、すごいよ、阪本君」

「まあな、有名人はつらいぜ。それではまずどこに座るかだ」

阪本の顔が真剣な表情になった。

田中も思った。

はっ、この真剣な表情は、阪本モードに入ってるな。阪本君が真剣に考えているとき、この世界と意識を切って集中するんだ。これは期待できるぞ。

阪本は思っていた。

やべーよ、どうしたらいいんだ。分けわかんね。パチンコってあそこ洗っておわりじゃねーの、銭湯の簡易ばんか大人の遊び場と違っていたよ。違うくね、まずはもちつけではなく落ち着くんだ。俺阪本。気づかれずに、田中にパチンコ知らないんでは思わないようにしなくては、よしファイト。

「田中、この台に座るぞ」

「わかったよ。阪本君」

意気揚々に座った。そして阪本は周りを見まわした。

「どうしたらいいの阪本君」

「だまつてろ、今集中してるんだ」

阪本は一人の男を見つけた。何々、あいつはお金を取り出して、ふんふん千円だな。なるほど投入口に入れると、おっ、そしたらコインが出てくるんだな。OK、OK。

「た、田中ー千円を出すんだ。それを俺によこせ」

「わかったよ。阪本君」

田中は千円を阪本に渡した。

「見とけよ、田中」

「うん」

「こうするんだ」

阪本は千円を投入口に入れるとメダルが50枚出てきた。

「すげーよ、阪本君。メダルがたくさんあるよ。」

「まあな、おい田中、もう一枚千円よこせ」

「うん、阪本君」

「見とけよ」

「うん」

「ほらみる」

阪本はまたもや千円を投入口に入れた。すると50枚のメダルが出てきた。

「おお、グレイト、すごいよ、阪本君」

「まあな、まだまだいくぜ。さあ、どんどん俺に千円を渡すんだ」

「うん、阪本君」

それを24回繰り返した。しかし25回目に悲劇がおこった。

「おい、田中。どんどもってこんかい。」

「・・・阪本君、もうお金がないよ」

「な、お金がないだと、そうか仕方がない、じゃあ帰れ」

「うん、ってあれ、なんかおかしくね」

田中は少し疑問に思っていた

「おかしくねえよ。ばかやろう、金がねえーんじゃ、パチンコでき

ないだろう。ただで、コンビニでアイスが買えるか、スーパーでアイスが買えるか、ええ買えないだろ。分かったら帰れあとは俺に任せとけて」

阪本は有頂天になっていた。

「それじゃあ、阪本君、お金返してよ」

「ばかか、俺はお金もってねえよ、120円しか」

「じゃあ、そのコインこっちによこせよ。それ僕のお金で出てきたんだから」

田中は正論をいったが。阪本は返すそぶりを見せなかった。

「ば、ばっきややろう。これはあれよ。俺の台のコインだから無理、あげれない。だってもったいねーじゃん」

「ひ、ひどいよ阪本君、ば、僕をだましたのかい」
泣きそうな顔で田中が言った。

それを見て。阪本はこういった。

「わかった、今からこのコインを倍に増やす。そしたら、おまえに半分やるそれで文句ねえだろ」

阪本はパチスロのやり方を周りの客の様子を見て覚えた。

ようは、777をそろえたらいいだけだ。それにコインはたくさんあるしな。

阪本は自信満々にスロットを打ち始めた。

「・・・大丈夫、阪本君」

田中は心配そうな顔で阪本を見ていた。

「安心しろ、田中ほら」

阪本は120円を田中に渡した。

「貸してやるから、向こうの休憩室でジュース飲みながら漫画でもみて待ってる。コインがたまったらよんでやるよ」

「うん、ありがとう。阪本君。やっぱ僕たち親友だね」

阪本は照れながら答えた。

「ま、まあな。例えるならロミオとジュリエットかな」

「それは違うよ。阪本君」

「はやくいつてこいつて」

田中は休憩室に行った。

「さて、それじゃあ、俺もひと稼ぎするかな」

数時間後、いつまでたっても阪本が呼びに来ないので見に行ったら、そこには阪本の姿はいなかった。

「さかもとーーーーー、あの野郎」

田中は叫んでいた。

そこに一通のメールが田中の携帯に届いた。

内容は「120円返せよ　BY阪本」
だった。

後日、阪本は田中にばこられた。

第4話

「おい田中知ってるか？」

「何、阪本君」

「サンタクロースの事を」

「うん、知ってるよ。サンタっていうのはね。4世紀頃の東ローマ帝国小アジアの司教（主教）、キリスト教の教父聖ニコラオス（ニコラウス）の伝説が起源であるんだ。「ニコラオス」の名はギリシア語表記なんだ。ラテン語ではニコラウス。イタリア語、スペイン語、フランス語ではサン・ニコラで。イタリア語ではニコラオとも言われ。ロシア語ではニコライと言った。そうだね。有名な話では、無実の罪に問われた死刑囚を救った聖伝も伝えられているよ。

こういう話しね。ある日ニコラウスは、貧しさのあまり、三人の娘を嫁がせることの出来ない家の存在を知ったんだ。ニコラウスは真夜中にその家を訪れ、屋根の上にある煙突から金貨を投げ入れたんだ。すると、このとき暖炉には靴下が下げられていたため、金貨は靴下の中に入っていたと言われてるんだ。この金貨のおかげで娘の身売りを避けられたという話しなんだ。靴下の中にプレゼントを入れる風習も、ここから来ているんだよ。他にもね、ニコラオスは学問の守護聖人として崇められているんだ、アリウス異端と戦った偉大な教父でもあったし。教会では聖人として列聖されているため、「聖ニコラオス^{セント}」という呼称が使われてるね。これをオランダ語にすると「シンタクラス」なんだよ。オランダでは14世紀頃から聖ニコラウスの命日の12月6日を「シンタクラス祭」として祝う慣習があるんだ。その後、17世紀アメリカに植民したオランダ人が「サンタクロース」と伝え、サンタクロースの語源になったそうだよ。正教会系の国では、サンタクロースは厳密に「奇蹟者」の称号をもつ聖人たる聖ニコラオス（聖ニコライ）であり、聖ニコラオスの祭日は12月6日なんだ。子供たちがこの日に枕元に靴下を

吊るしておく、翌朝に入っているのはお菓子さ。クリスマスである12月25日は聖体礼儀に行く日で、プレゼントはないんだ。

ユリウス暦を採用している正教会（エルサレム総主教庁、ロシア正教会など）の聖ニコラオスの祭日は12月19日であり、主の降誕^{クリスマス}祭は、現行の暦に換算すると1月7日でなんだ（2008年現在、ユリウス暦とグレゴリオ暦の間には13日の差があるため）。ロシア

アでは1月7日にジエド・マロース（Дед Мороз, マロース爺さん：マロースとはロシア語で「吹雪」「寒波」という意味）と孫のスネグーラチカ（Снегурочка, 雪娘）がプレゼントを運んでくるんだ。いいよね」

田中はまるで辞書のように話した。

「……うん、その通り」

阪本は思った。あれ？田中ってこういうキャラだったわけ？サンタクロース、赤い服を来ている、太っていて白いひげを伸ばして、子供たちにプレゼントを配る人しか俺は知らなかった。何、あれ？辞書見たいに長々と、どんだけサンタクロースが好きなんだよ。外国語ばつか使いやがって、お前は外国人か？日本人なら外国語使うな。なんか、くやしい。だめだめ、このままだったら、力関係が逆転してしまう。田中さんになっちゃう。なんとかしなければ。阪本は考えた。

「……田中、それは間違ってる。お前は本当のサンタクロースの事を知らない。お前に教えてやろう。サンタクロースとは何かを」

「えっ、そうなの。教えてよ。阪本君」

「よし、良く聞けよ。サンタクロースってのはな」

意気揚々と阪本は話した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8157h/>

阪本君と田中君

2010年10月9日03時20分発行